星がゆれる時

津村節子

集英社文庫

集英社文庫

星がゆれる時

昭和56年2月25日　第1刷
昭和61年6月25日　第11刷

定価はカバーに表示してあります。

著者　津村節子

発行者　堀内末男

発行所　株式会社 集英社
東京都千代田区一ツ橋2－5－10
〒101
電話　東京　(238) 2842（編集）
(230) 6171（販売）

印刷　図書印刷株式会社

著者と了解のうえ検印を廃します。　（落丁本・乱丁本はおとりかえします）

© S. Tsumura 1981

Printed in Japan
ISBN4-08-750395-X C0193

集英社文庫

星がゆれる時

津村節子

集英社版

目次

第一章　星占い……六
第二章　揺れる心……四六
第三章　別れ……九一
第四章　逢いびき……一五八
終　章……二三八
解　説　大河内昭爾

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

星がゆれる時

第一章　星占い

夢うつつに、雨の音を聞いたような気がした。路子はそれを確かめるのを恐れて、慌てて眠りの中に身を沈めようと、目もとまで掛け蒲団をひき上げた。

並べて敷かれている隣りの床から、夫が新聞を取りに起き出して行った気配に再び目を覚ましたが、確かに雨の音がしていた。路子ははね起きて、寝室の雨戸を開けた。強い雨ではないが、容易に止みそうもない降り方である。

天気予報では、はっきり〝晴れ〟と言っていた。昨日の天気模様から言っても、しばらくはもちそうだったのに、と路子は開け放った窓から、雨脚をぼんやり眺めていた。細かい飛沫が容赦なく顔にかかる。

「おい、窓を閉めろよ」

新聞を持って床にはいった夫が、路子の背に声をかけた。

「どうしようかしら」

路子は夫へというより、自分に問いかけるように言った。

「何がだ」

「今日、クラス会なのに」
「それがどうした。行くんだろう？」
「雨が降っちゃって」
「たいした雨でもないじゃないか」
「だって着て行くものがないのよ」
「そのために着物を新調したんだろう？」
クラス会を口実にして作った着物が、できてきているのだ。
「着物はいいけれど、雨ゴートがないのよ」
雨の中を、コートなしで新しい着物を着て行くわけにはいかない。たださえ汚れやすい白地の小紋である。
「タクシーで行けばいいさ」
夫は簡単に言うが、タクシーを拾う大通りまでの道を、どうして行けばいいのか。コートだけの問題ではない。履き物もこの雨では、草履というわけにはいかない。
それに、会場までは、タクシーで行ったとしても、そのあと親しい友達と二次会へ回ることもある。
「この雨の中をコートも着ないで行ったら、持っていないということが歴然としちゃうわ」
口をつぐんでしまった夫が、自分のことを愚かしく思っているのを感じながら、男なんかに、わかるものか、と路子は思った。当日が晴れとは限らないのだから、雨ゴートも作っておけばよ

かったのだ。それだけの余裕のない生活が、路子は不満なのであった。

レインコートは持っているが、クラス会に着て行けるような服はない。こんなことなら、ワンピースでも買えばよかった、と悔いたが、いつも代わり映えのしない洋服ばかりなので、今年は印象をかえてみたかったのである。

女のクラス会は、彼女らが独身時代には比較的派手に行なわれる。まだ親がかりで、サラリーはほとんど自分の小遣いにできるから、会費が多少高くてもデラックスな会場が好まれるし、従ってそれにふさわしく華やかに装って来る。

結婚し、出産すると、当然のことながら出席率は悪くなるので、赤ん坊を連れて来ても差し支えない場所が会場に選ばれる。子供が少し大きくなると、夫が子守役をするので、日曜日の日中がクラス会にあてられる。会費が家計にひびかぬような額であることも、幹事は心得ていなければならない。

が、最近出席率もよくなって来て、服装も整って来たのは、子供の手が離れはじめると同時に、夫たちの地位も多少上がり、収入もふえてきているということなのだろう。そのうち、子供たちの教育費が家計の大きな比率を占めるようになるのだが、それまではいささかのゆとりが持てる時代である。

路子は、美しく装って来る誰かれの顔を思い浮かべて、すっかり気持ちが萎えてしまっていた。しかし、着て行くものがないから出席しないというのも、あまりにばかげているという理性もないわけではない。

路子は気を取り直して、朝食の支度にかかった。雨の日に一日家でくすぶっているよりは、まだクラス会へ出掛けたほうがましである。こんなときでもなければ、夫に子供をあずけて一人で出掛けられる機会はなかなかない。

期待していたが、出掛けるときになっても、雨は止んではくれなかった。去年の夏の終りにバーゲンセールで買ったワンピースを出して着換えていると、

「ゆっくりして来ていいよ。夕飯は鮨でもとればいいんだから」

夫は、新調した着物を着て行くことをあきらめた妻の心中を思いやってか、やさしい口調で言った。

二DKの公団アパートを出ると、さすがにいくらか気持ちがはずんできた。一年ぶりに会うクラスメートたちが懐かしくないわけではない。結婚してしまうとお互いに家庭に縛られてしまい、なかなか会う機会がなかった。隣り近所や、幼稚園の母親同士のつきあいはふえるが、それは通り一ぺんのものであり、泣いたり、怒ったりした高校時代の友達とは違う。表面だけのつきあいでは儀礼的な言葉の応酬で神経が疲れ、お互いに腹の探り合いで本音は吐かず、いくら話をしてみても、胸に澱のようなものがたまるばかりですっきりしない。その点、気の置けないクラスメートたちとのお喋りは、変化の乏しい日々の積み重ねである結婚生活の鬱屈を晴らす適当な場だった。

路子は、デパートで紺地に白の水玉のロングスカーフと、スカーフをとめるリングを買い、化粧室にはいった。平凡なシャツカラーの黄色い無地の服の胸に、スカーフを大きく蝶結びにして

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

止めると、顔まで明るくいきいきとするようであった。

路子は、雨のしめりで髪のセットがくずれかけているのを手早く整え、口紅をさし直した。

まだ、自分はそれほど所帯やつれしては見えない——。

鏡の中の自分にほぼ満足して、路子は会場のレストランへ向かった。

新宿駅から徒歩で数分のところに、そのレストランはあった。国電のほかに何本もの私鉄が乗り入れしているので、新宿が会場に選ばれることが多い。主婦の行動半径には限度があるのだ。

ビルのエレベーターの前で、路子は数人の旧友たちに会った。エレベーターガールのいない小さな箱の中は、たちまち賑やかな女たちの声が充満した。お喋りをしながら、素早い視線が相手の服装を品定めしている。

会場にはいっていくと、すでに席に着いている人々の目が一斉に注がれる。毎年のことだが、この一瞬が路子は苦手であった。注目を浴びた人々は大急ぎで席に着く。今度は眺める側になるのだ。

路子は、窓側のテーブルで手を振っている珠子のほうへ、小走りに近づいた。

出席予定者がほぼ全員揃った頃、芙美が急ぎ足ではいって来た。彼女は今年も和服姿で白大島に、紅型の帯を締めている。雨のせいか、和服は芙美だけである。それだけに、水際だって見えた。

彼女は紬を好んで着る。それで路子は染めの着物を作ったのだが、着こなしという点では日常

着馴れている芙美にはかなわない、と今さらのように認識させられ、やはり自分は洋服で来たほうがよかったと思い直した。

今年も、なつ子の消息はわからぬまま、クラス会を迎えた。高校三年間を通じて、何度か小さな仲違いを繰り返しながらも、四人はグループとして親しく交際を続けてきた。卒業後も常に連絡は取り合ってきたのだが、六年前に、不意になつ子は消息を断ってしまったのである。それ以来、クラス会にも一度も姿を現わしていない。

グループで真っ先に結婚したのは、なつ子であった。相手は十歳近くも年上で、遠縁にあたり、なつ子がまだ高校時代から話が決まっていたらしく、卒業を待ちかねたようにその年の秋、挙式した。

「まだこれから、いろんな男性にめぐり会えそうなのに、こんな結婚、夢がなさすぎるわ」

路子たちにこぼしていたが、相手は前々からなつ子を懇望しており、かなり強引な求婚だったようだ。なつ子がまだ若すぎるということをのぞけば、お互いの家同士よくわかっており、亡父のあとをついでレストランを経営している男の生活は一応安定していて、なつ子の両親もあえて反対はとなえなかったという。

卒業してから結婚式までの半年あまりが二人の婚約期間で、なつ子はあれこれと稽古ごとに通うかたわら、婚約者と交際していた。その間は、路子たちとつきあう暇もないほど忙しそうだった。

結婚式には、むろん、路子、珠子、芙美の三人が招かれた。なつ子が、あまり気の進まないような口ぶりだったので、彼女らは新郎を見たとき、いささか裏切られたような気がした。路子た

ちがボーイフレンドや恋人として考えるのは大学生か、せいぜいそれより少し年上のサラリーマンだが、十歳の年の差があるというだけに、その男は落ち着いて見え、商売柄人の応対もそつなく、洗練されていた。

「おなつのヤツ！」

珠子が腹立たしそうに言った。

「こんな結婚、夢がないなんて言ってさ。結構気が進んでいたんじゃない？」

「それはそうでしょうよ。そうでなきゃ結婚に踏み切れないわ」

ウエディングケーキを切るとき、なつ子の手に新郎の手が重ねられた。カメラに向かったなつ子の顔には、世界中の幸福を独り占めしているような微笑が浮かんでいた。

「全く、あきれたわ。結婚の準備で忙しい、忙しいって、デートのほうが忙しかったんだわ」

「デートだって、つまりは結婚の準備よ。お互いをよく知るための」

「いいじゃないの。泣き泣きお嫁に行くよりは」

「だけど、それなら嬉しそうな様子ぐらい見せればいいじゃないの。交際期間中に、一度ぐらい紹介したって減るもんじゃなし」

「嫉かない、嫉かない。今度はタマちゃんの番だからさ」

「とんでもない。私はね、もっともっと独身生活を楽しんでからよ。まだいっぱいすることがあるんだもの」

それは、路子たちも同感だった。なつ子の夫が思いがけなく魅力的に感じられたのは事実だが、

だからと言って自分たちもすぐ結婚したい、と思ったわけではない。
路子はそのころ、短期大学の家政科に通っていたし、珠子は洋裁学校に通っていた。芙美は経理事務所に勤めながら、生け花を習っていた。生け花は高校時代から習っていて、将来その方面で身を立てたい、と言っており、路子ははっきりと自分の目標を持ってそれに向かって精進しているらしい芙美に、畏敬の念と、珠子には感じたことのないかすかな隔たりを感じていた。
その後三人は、時折り新婚のなつ子をたずねた。なつ子の夫のレストランでご馳走になることもあったが、なつ子は店を手伝わず、マンションから夫を店へ送り出すサラリーマンの妻と同じ生活であった。
「お店を手伝って、共働きすればいいのに――」
「そのほうが、毎日家の事をしているよりも面白いと思うけど」
しかしなつ子は、まめまめしく三人に手製のクッキーやゼリーをすすめ、
「私、客商売って向いていないのよ。こうしてうちのことをしているのが、一番楽しいの」
などと言っていた。
なつ子が出産したとき、病院へ三人揃って見舞いとお祝いをかねて行ったが、それからは赤ん坊の世話で忙しいだろうと思い、路子はしばらく彼女を訪ねなかった。独身の三人も、卒業して日が経つにつれ、学校や職場やそれぞれの周辺に友だちができて、以前のように会うことはなくなっていた。
あるとき、路子はなつ子の夫が経営しているレストランの前を通りかかったので、なつ子の様

子をたずねたいと思ってのぞき込んだ。だが、顔見知りの従業員も見えず、なつ子の夫の名を言っても、知らないという返事である。店を間違えたのか、と思わず周囲を見回したが、外装も内装もほとんど以前と変わっていない。

白昼夢でも見ているような気がして呆然と佇んでいると、新しい経営者らしい男が出て来て、

「前の経営者のことをおたずねとのことですが、私も、この店が売りに出ていたのを買っただけで、何もわからないのですが――」

と言うのであった。

クラス会の会場は、ほぼ満席になった。受付に座っていた幹事も席に着き、挨拶がすむと、料理が運ばれはじめた。

「おなつ、いったいどうしているのかしら」

三人揃えば、やはりなつ子の噂になる。

「どんな事情があったにせよ、私たちにまで消息を知らせてくれないっていうのは、水臭いじゃないの」

「もしかして、もしかしてよ。おなつは」

言いかけて口籠った路子は、不吉な想像を打ち消した。

なつ子の夫が経営していたレストランが、他人の手に渡っていることを知った六年前のあの日の驚きを、路子は今もありありと思い出す。

すぐなつ子のマンションへ電話したが、そこもすでに他人がはいっていた。レストランの新しい経営者と同様、なつ子たちのマンションを買った住人も、先住者のことについては何も知らなかった。

それきり、グループの誰のところへも何の連絡もないのだった。

クラス会にはつきものの、自己紹介が始まった。席の順に一人ずつ立って卒業後の生活を報告する。あまりに変貌してしまい、旧姓を名乗られなければ誰だったか思いあたらぬ者もあり、旧姓を名乗られても思い出せぬほど、印象の薄かった者もいる。

早生まれの者は二十八歳、遅生まれは二十九歳になっていて、過半数が結婚していた。独身者はほとんど勤めをしており、

「女ばかりの職場で、結婚相手は見つかりそうもありません。いい方があったら、ぜひご紹介ください」

などと、冗談めかして、しかしかなり真剣味のこもった口調で言う者もいる。

路子は製薬会社に勤めるサラリーマンの夫と、五歳の男の子との三人暮らしで、別に報告するようなこともない平凡な毎日であった。

珠子は、洋裁学校を卒業し、親戚の洋品店を手伝っているときに知り合った、既製服メーカーの息子と結婚し、現在夫と共にブティックの店を経営している。珠子は自己紹介をかねて、抜け目なく自分の店の宣伝をした。

芙美は、結婚後も続けている生け花を、このごろ近所の奥さんや娘さんたちに教えている、と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com